慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代ケルト民族の自然観
Sub Title	
Author	林, 瑛二(Hayashi, Eiji)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.147- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代ケルト民族の自然観

林　瑛二

1

和辻哲郎はその著書『風土』の中で、西欧の自然が比較的温順であること、つまり自然に対する人間の支配、人間の「作業知」の開発を可能にする風土的特性の故に、等しく「牧場的」風土をもつ南欧から合理的精神が必然的に継承されていったと語っている。更に彼は、この合理精神という伝統の中で近代西欧文化が古代南欧文化と歴然たる相違をなして、動的、内面的、主観的、無限追求的世界観を発展せしめるに至った窮極的原因を西欧の冬の陰鬱に見出した。確かに西欧の冬は高緯度による昼間の短かさもさることながら雲の低く垂れこめた陰鬱な曇り日が非常に多い。筆者自身も二年余りの英国留学生活で、十月半ばから四月半ばまでの約半年間は気の滅入る堪え難い日々の連続であった。たまに早朝雲一つない空を見て「日本晴れ」などと冗談を言いつつ小踊りしても、小一時間もしないうちに周り一面かき曇って、薄暗い世界へ逆戻りしてしまうのであった。その上周知の如く二、三メートル先も見えなくなる程の濃霧が時折やってくる。寒さも時にかなり厳しいのではあるが、厚い外套やら暖房やらの手段を講じれば容易に凌ぐことができる。何よりも儘ならないのはあの暗さ、陰鬱さである。寒さの点ではヨーロ

ッパ大陸の北部の方が遙かに厳しく、雪も多い。従って日照りの日も少ないには違いないが、蛍雪の譬えの通り、積もった雪はそれなりに一種の光をもたらしてくれる。英国にもたまに雪が降るには降るが、北大西洋海流という暖流の影響で、量も少なく、幾日にもわたって積雪をみることは殆どない。大抵は小雨か霧を生み易い重苦しい曇天の日々である。従って和辻哲郎の言う「西欧の陰鬱」は英国に於いて最もその度合いが強いように思われる。更に、この地に住む者にとって困難な状況は土地の不毛である。土地の肥沃さはそこに生える植物の量で判断され得るが、英国の中で鬱蒼たる緑に覆われている所はそう多くはない。今日なお人々の開墾を寄せつけない荒野や湿原が相当の広域にわたって散在している。まして未だ人々が、一定の場所に土着して農業に従事するようになる以前、狩猟なしい海賊民族であった古代の英国は文字通り荒涼寂莫たる世界であったに相違ない。

このような人間の支配を容易に寄せつけない混沌たる自然環境の中では、人々の間に自然に対する神秘的な観念が生まれ易い。それはアジアに見るような、圧倒的自然の力を我のうちに取りこもうとする一元的形而上学にまで発展し得ぬ間に、キリスト教に包みこまれてしまった。それでも尚、度重なる他民族の侵攻に敗れて奥地に四散した原住民の子孫達の社会では、彼ら特有の神秘的世界観が少なくとも中世までは確実に受け継がれていたようである。そうした地域とはアイルランドやウェールズやスコットランドの高地であるが、最近とみにそれらの地方に残る原住民族の言語であるケルト語による詩の写本が翻訳されるに至っている。本稿は、筆者自身未だケルト語の研究にまでは余力がないために、それら専門家の現代英語への翻訳を借りて英国原住民の特異な自然観を分析してみようとするものである。そしてそれによって、後年この国の優れた詩人たち、とりわけ浪漫的と呼ばれた詩人達が文明の逸脱を修正すべく彼らの祖先の生き方に一つの指針を見出した理由を示唆したいと思う。

2

英国の原住民は一般にはケルト民族と言われている。しかしこれは紀元前四世紀頃のギリシャ人がアルプス以北の西欧人一般を指してケルトイ人と呼んだことに端を発しており、厳密に特定の人種を指した名称ではない。しかし、彼らは同一の起源をもち、似かよった言語を話していた。彼らは人口増加に伴い次第に西欧の各地に分散していき、各地の原住民と混血して小部落を構成し、各々の独立と勢力の拡大のために抗争を重ねながら安住の地を求めて彷徨っていたのである。ジュリアス・シーザーが紀元前五五年にブリテン島に侵攻した時、既に幾つかのケルトの支族がこの地に小さな王国を築いていた。その主たる支族はブリトン人とゲール人の二派であった。やがて彼らはローマ人、サクソン人、ヴァイキングやノルマン人の侵略を受けて、彼らとの混血を受けながら、ブリトン人はウェールズやコーンウォールに、ゲール人はスコットランド高地や、アイルランドに追いやられていった。彼らに共通する美質は深い自然愛とそれに基づく高度の審美感である。それは紀元前五世紀に栄えた中央ヨーロッパのケルト民族によるラテーヌ文化の出土品にも見出されなくもないが、それ以上に英国内に残るブリトン人やゲール人の遺品にこそ一層著しい。その原因はこの地の風土と深い関わりがありそうである。大陸のケルト民族と血の繋りがないわけではないが、彼らがこの地に住みつくようになるまでには何百年あるいは何千年もにわたる隔りがある。その間には他人種との混血もあり、環境による影響も深甚であったに相違ない。言わば全く別な人種になり変わっていたのだ。

3

ブリテン島のケルト民族にとって、夜ないし暗さの意味は極めて深い。夜は冥界に通ずるものと考えられ、畏れられ且つまた尊ばれてもいた。妖精や魔性のものが徘徊し、死者の霊が彼岸より舞い戻ってくる時である。そのため彼らの風習には夜に関わるものが少なくない。例えば、言い伝えられる教訓の中に、夜歩き、夜鍋、夜の水まきや灰まき、夜の戸外で口笛を吹いたり名前を呼んだりすることへの厳しい戒めがある。それは一方においては彼らの身の安全を期した手だてではあるが、他方そういう冥界からの訪問者達への心遣いから出たものである。寝しなに暖炉を掃除し周辺を整頓することは彼岸よりやってくる精霊達へのもてなしとして教えられる。彼らは自らを「夜の神の子」と呼び、魔界の精との共存共栄を大切にする。昼は人間の世界、夜は精霊の世界である。子供達はしばしば年長者から超自然的な存在について様々な物語を話される。冬の夜長には炉辺の語らいはまさにそういう話でもちきりである。

ところで、この冬という観念は彼らにとって夜と同一視される。一年の約半年間英国は曇り日の多い陰鬱な雰囲気に包まれることは既に述べた。彼らには本質的に四季の観念はなく、一年は夏と冬に二分される。地域差はあるが、冬のある月を「暗い」または「暗黒の月」と呼び、冬は黒い顔の王が主宰する死者たちの饗宴の舞台と解される。

また時間的にも空間的にも二つのものの境界には神秘的な力が介在すると理解される。従って夜明けと日没には禁ぜられる行為が色々とある。夏入りと冬入りの夕べは魔力をもつ妖精が特に活動する時と見なされ、中でも冬入りの祭ハロウィーンは妖精や死者の霊が眼前に現われると言われる。若者による仮面変装は生と死、男と女、我と

他者、現実と神秘の隔絶の解除を意味する。同様に、空間的境界も冥界の霊が出没する場である。二つの町の間を流れる川には病いや怪我を直す力があると言われる。牧場の柵の踏み越し段は幽霊の休み場である。キリストの昇天祭には子供達は行列を作って柳の枝で教区の境界を打って歩いた。これはそこにたむろする魔界の霊を追い出してキリストに道を開くためでもあろうか。

時間的場所的な境界に関するこうした神秘的観念を生み出す要因はやはりあの冬の陰鬱である。薄暗く朦朧とした世界では全ての物はその輪郭を明らかにせず、互いに折り重なり溶け合ってみえるものだ。そしてその重なり溶け合った部分は単純な二者の中間色というよりも、一種の半透明状態を形成する。この二者の交錯による霊妙な実在感こそまさしく彼らの神秘的観念を呼び起こすよすがに外ならない。人は、そういう不分明な物を包む無限の空間を瞬間的には楽しむことはできても、そうした状態の持続の中ではむしろ非常な畏怖感を覚えるものだ。尋常な意識の持ち主なら神秘や無限の中に安住はできない。少なくとも己れに関して、独立した個の認識なしに生はあり得ない。彼らは独立せる自己の認識のために自らの視覚世界、外界への事物の個別性を確認しようとした。暗い所で目を見開くように、曖昧模糊とした世界で各々の存在の境界を深く意識に留めようと努めた。時間的空間的境界に浮遊する魔界の精霊は絶えず彼らの存在認識を脅かしたが、同時にそれは彼らに鋭い観察眼を持たしめたのである。見えなければ見ようとし、見たいと思うのが人情である。古代のケルト人が描き書き遺したものを見ると、彼らを取り巻く事物をしっかりと見すえる姿勢がありありと顕われている。残存する工芸品の図案には特定の自然形象をモデルにして、その形状を見事に抽象化したものが多い。しかも鋭い流動的な線により生命感さえ漲らせている。これは具体的対象を鋭く観察した結果であればこそ初めて生み出せる業なのである。同時にこれは、彼らが実生活の中で神秘や無限を容認せざるを得ない状況に包まれていることから、必然的に培われた鋭い直観と想像力の

なせる業でもある。こうした資質は更に彼らの遺した歌や物語にも如実に見い出せる。

4

ケルト民族の遺した文学作品で現存する最古の写本はウェールズにあったもので、西暦五六〇年前後の作とされる。その主たるものは大英博物館に保存された三冊の写本（「カマーゼンの黒本」、「アヌーリンの本」、「タリエシンの本」）とオックスフォード大学のジーザス校に保存された「ヘアゲストの赤本」という一冊の写本である。これらの写本に集められた詩はそれぞれ、その朱書き題目や写本の名称、聖伝などにより、六世紀に生存したという四人の詩人ミュルジン、アヌーリン、タリエシン、リュワーチ・ヘンの作とされている。これらの詩は主として戦いや英雄を歌ったものや、神の讃歌の類が多いのであるが、中には直接に自然の形象を讃美したものもあり、そうでなくとも随所に素直な自然描写が折り込まれている。

まず、次の「タリエシンの本」第八部にみられる詩の一節は数多の戦士が樹木に身をかえ、グーレディグ（ローマの武将）に率いられたローマ軍に立ち向かう様を描写したものである。

And Christ crucified,
And the day of judgment near at Land.
The alder-trees, the head of the line,
Formed the van.
The willows and quicken-trees
Came late to the army.

Plum-trees, that are scarce,
Unlonged for of men.
The elaborate medlar-trees,
The objects of contention.
The prickly rose-bushes,
Against a host of giants,
The raspberry brake did
What is better failed
For the security of life.
Privet and woodbine
And ivy on its front,
Like furze to the combat
The cherry-tree was provoked.
The birch, notwithstanding his high mind,
Was late before he was arrayed.
Not because of his cowardice,
But on account of his greatness.
The laburnum held in mind,

That your wild nature was foreign.
Pine-trees in the porch,
The chair of disputation,
By me greatly exalted,
In the presence of kings.
The elm with his retinue,
Did not go aside a foot;
He would fight with the centre,
And the flanks, and the rear.
Hazel-trees, it was judged
That ample was thy mental exertion.

（キリストは磔にされ、審判の日は間近か、戦列の頭、河原榛木が先陣をきる。柳と七竈は遅れて従軍。残り少なの李らは徴兵されず。見事な花梨は戦闘の的。刺持つ薔薇は巨人の軍勢に立ち向かう。木苺は、命も顧ず、命令以上の働きをする。水蠟、忍冬、蔦は大胆不敵、針槐の如く、桜も一騎打ちに駆り立てられる、撫は、その気高い精神にも拘らず、遅ればせに陣列参加。小心の為でなく、大柄のため。金鎖は我等の荒々しい気質が並ならぬことを忘れなかった。松は作戦の場なる陣営に構え、我は諸王の前でその手際を讃えた。楡は従者と伴に一歩もひるまず、敵の中央、側面、後部と戦う。榛は主君の精神力が衰えな

きと判断した。）

こういった調子で尚も滔滔と続けられている。以後言及される植物名を列記すれば、山査子、箱柳、羊歯、金雀枝、ヒース、樫、梨、栗など枚挙にいとまがない。一見したところでは、植物を兵士に見たてて、やたらと羅列しているようであるが、どこか林立する樹木の佇を彷彿とさせるものがある。現実にこれほどの樹木が立ち並んでいるとは思えないので、詩人の想像の世界であることには違いない。ただ植物を人間と同一視する視点は詩人の心中に深い自然愛が満ち満ちているからである。更に推し測れば、植物の持つ受動的活力に人間の理想的なあり方を見出しているとも思われる。冒頭の磔刑のキリストはこの解釈をいかんなく支えてくれる。

同じタリエシンの作で写本第十七部の「風の歌」は、ローレンス・ビニョンも絶賛しているが、大自然の神秘を象徴する「風」を詩人の理想的境地として賛美したものである。

Guess who it is.
Created before the deluge.
A creature strong,
Without flesh, without bone,
Without veins, without blood,
Without head, and withovt feet
It will not be older, it will not be younger,
Than it was in the beginning.
There will not come from his design

Fear or death.
He has no wants
From ereatures.
Great God! the sea whitens
When it comes from the beginning.
Great his beauties,
The one that made him.
He, in the field, he in the wood,
Without hand and without foot.
Without old age, without age.
Without the most jealous destiny
And he (is) coeval
With the five periods of the five ages.
And also is older,
Though there be five hundred thousand years.
And he is as wide
As the face of the earth,
And he was not born,

And he has not been seen.

He, on sea, he, on land,

He sees not, he is not seen.

He is not sincere,

He will not come when it is wished.

He, on land, he on sea,

He is indispensable,

He is unconfined.

He is unequalled.

He from four regions,

He will not be according to counsel.

He commenees his journey

From above the stone of marble.

He is loud-voiced, he is mute.

He is uncourteous.

He is vehement, he is bold,

When he glances over the land

He is mute, he is loud-voiced

He is blustering.
Greatest, his banner
On the face of the earth.
He is good, he is bad,
He is not bright,
He is not manifest,
For the sight does not see (him).
He is bad, he is good.
He is yonder, he is here,
He will disorder,
He will not repair what he does
And he sinless,
He is wet, he is dry,
He comes frequently
From the heat of the sun, and the coldness of the moon.

（そは何者か。大水に先だって創られた者。肉もなく、骨もなく、脈管もなく、血もなく、首もなく、足もなくとも強き生命。老いもせず、若返りもせず、初めの姿そのままだ。恐怖も死も彼の意図するとこ

ろではない。他の命より何一つ求めることがない。大いなる神よ、初めより訪い来れば海も白む。これ程の美の主は限りなく美しかろう。ある時は野に、ある時は森に、手もなく足もない。齢を知らず、老いもない。妬みをかう宿命もなく、いつの世のいつの時代にも現われる。それでいて五十万年経た今も一番の年長者。大地の面に劣らない広がりをもち、親も持たず、姿も見せない。時には海に、時には陸に、見ることもなく、見られもしない。真意を見せず、望んでも現われない。時には陸に、時には海に、不可欠にして、拘束されず、無比の存在。どこからもやってくるが、勧告に従うことはない。大理石の巌の上から旅に出る。時には声高に、時には無言。大地を見はるかせば、遠慮会釈なく、激しく哮り立つ。時には声をひそめ、時には怒号し吹きすさぶ。大地の面に巨大な軍旗を翻す。時には優しく、時には邪悪。実在しながら眼には見えない。時には苛酷、時には慈悲深い。かなたにありてこの場にもあり、ものみなをかき乱す。己が所業の償いもせず、罪もない。湿ったり乾いたり、日輪の炎熱より来るかと見れば、月輪の冷気をもってくる。）

ここには一切人事との関わりをもって風を歌ってはいない。嘆願もなく、感傷も、恐れもない。極めて平静に、ある不遍の生命に達観の境地を見出しているのだ。いやそれだけではない。詩人は視覚の限界を越えて、生命の本源を、真実体を把捉している。瞬間と永遠、一所と無限、善と悪その他諸々の二律背反を止揚した至高なる美の世界に浴している。まさしく不条理の条理、混沌の調和、超現実的現実の有様にほかならない。果たして我々はこれほど純粋に偏りなく自然の現象を描き得た詩を読んだことがあるだろうか。長短折り交ぜた詩行も見事に風の息吹きを感じさせ、力強く生命の律動にあふれている。あまりにもリアルであるために、あまりにも神秘的なのである。

次の一節も自然に対する鋭い観察と深い洞察が詩人の人間性をこの上もない高みに引きあげている見事な例であ

る。これはミミルヂヤンの作とされる「カヤーゼンの黒本」三十部から引いたものだ。

The bees (live) on their shore; small the clamour of birds,
The day is dewless;
The hill-top is a conspicuous object; red the dawn.

The bees are under cover; cold also is the ford,
Let the frost freeze as long as it lasts:
To him that is soft may dissolution happen!

The bees are in confinement this very day;
How withered the stalks, hard the slope;
Cold and dewless in the earth to-day.

The bees are in shelter from the wet of winter;
Blue the mist, hollow the cow-parsnip;
Cowardliness is a bad quality in a man.

Long the night, bare the moor, hoary the cliff;
Gray the fair gull in the precipice;
Rough the sea; there will be rain to-day.

Dry the wind, wet the road,
The vale assumes its former appearance.

Cold the thistle-stalks; lean the stag;
Smooth the river; there will be wine weather.

Foul the weather on the mountain; the rivers troubled;
Flood will wet the ground in towns;
The earth looks like the ocean!

Thou art not a scholar, thou art not a recluse;
Thou wilt not be called a monarch in the day of necessity.
Alas! Cynddilig, that thou wert not a woman!

Let the crooked hart bound at the top of the sheltered vale;
May the ice be broken; bare are the lowlands;
The brave escapes from many a hardship.

The thrush has a spotted breast,
Spotted the breast of the thrush;
The edge of the bank is broken
By the hoof of the lean, crooked and stooping hart.

Very high is the loud-sounding wind;
It is scarcely right for one to stand out.

At All-Saints it is habitual for the heath-tops to be dun;
High-foaming is the sea-wave,
Short the day;—Druid, your advice!

If the shield, and the vigour of the steed,
And of brave, fearless men, have gone to sleep,

The night is fair to chase the foe.

The wind is supreme; sere and bare the trees
Withered the reeds; the hart is bounding;
Pelis the False, what land is this?

If it poured down snow as far as Arvwl Melyn,
Gloom would not make me sad;
I would lead a host to the hill of Tydwl.

（蜂はその貯えに頼り、小鳥の囀りも少ない。今朝は露もなく、山頂はくっきりと見え、曙光が赤々と映えている。蜂は囲いに潜み、浅瀬の水も冷たいが、凍てつく霜とて厭いはしない。優しき者には溶けもしよう。蜂も今日ばかりは巣に入りびたり。草木は萎れ、山膚も凍りついている。大地は冷たく露もない。蜂は冬の湿気を避けているのだ。霞は青く、はなうどは立ち枯れの風情。こんな時、気弱になるのが人間の悪い癖だ。夜は長く、荒れ野に緑なく、崖はほの白い。絶壁の麗しい鷗も灰色にくすみ、海は荒く、今日もまた雨になりそう。大気は乾き、道は泥濘み、谷はまた以前の相貌を呈す。薊（あざみ）の茎も冷たく、雄鹿の身も痩せこけている。川は静かに流れ、やがて好天の日も来よう。山の天気は荒模様、川もざわめき、洪水で町も水びたし。大地はさながら海のようだ。御身は知恵者でも隠者でもない。王と呼ばるる運命も持

ちあわせない。あわれ、キンディリグよ、女であればよかったものを。老いさらばえた雄鹿とて山深い谷間の尾根を駆け回れ、氷も裂けよ、低地には緑なく、勇者さえ難儀を厭う。鵜は胸に斑点をつけ、その点々が著しい。土手の緑は、痩せこけ老いさらばえた雄鹿の蹄で、崩されている。風は激しく、唸りをあげ、立っているのもままならない。万聖節にはヒースの丘も黒ずむのが常だ。海面はひときわ泡立ち、日暮れも早い。呪師よ教え導きたまえ。盾かざす勇ましい豪傑も、血気あふれる駿馬ともども、休らいに伏しているなら、今宵こそ敵の追撃に絶好の折だ。強風が吹きすさび、木々は萎え、枝もあらわ。葦も枯れ、跳ねゆくは雄鹿ばかり、意気地なしのピーリスよ、これこそがわが故郷。たとえアルブール・ミリンの地まで雪が降ろうと、空の陰鬱に心まで萎れはしない。われ軍勢を率いてティドルの丘へ進撃しよう。〕

ケルトのうた人は戦士でもあった。彼らは度重なる外敵の襲来に抗して、家庭を支え、王国を守っていかなければならない。とはいえ、寒い疾風の吹きまくる冬の荒天の連続は、どれほど頑健で気丈夫な彼らでも、あまりにも堪え難い重圧であろう。時には身も心も打ちのめされそうになるかも知れない。この詩の作者は、そうした折に、大自然を見渡し、同じ厳しい条件の中で雄々しく生きている諸々の生物の姿をしっかりと把え、自らの生き方の指針にしている。草もなく葉もない荒野を、痩せ細り老いさらばえた雄鹿さえ逞しく走っているではないか。凍てついた土手を蹴り損って怪我を負っているかもしれない。鷗もこの寒空の中で絶壁に立ち、小柄な鵜までも虫の少ない荒野の中で斑点だらけの胸をはっている。葦は枯れ、草木は萎れても、巣にうずくまる蜜蜂のように、堅い幹の中、凍った大地の下でしっかりと息づき春を待っているのだ。他の生き物にできることをどうして人間にできないことがあろう。命ある限り、いかなる苦難をものともせずに、精いっぱい生きることこそ、われらを創りたもう神へのなし得る最大の恩返しである。そもそも、われらを包むこの大自然、山も海も川も谷も、そしてそこに宿る

生命を脅かす霜も氷も雪も風も、全てが神のなせる業ではないか。この詩の作者は別の作品（同書三十八部）の中で次のように歌っている。

A cry from the roaring sea comes upon the winds;
The mighty and beneficent god has caused it!
Common after excess is want.

A cry from the roaring sea
Impels me from my resting-place this night;
Common after excess is far-extending destruction,

（咆哮する荒海の声が風に乗って聞こえくる。それとても大いなる慈悲深き神の御意なり。いや増せる恵みの後は窮乏が世の習い、咆哮する荒海の声に誘われ、われ今宵立ち行かん。いや増せる恵みの後は果てしない暴虐が世の習い。）

厳しい試練を堪え抜いてこそ、様々な形での神の恵みに深謝できるのである。ケルトの詩人達は、彼らに課せられた苛酷な生活条件の中で、かえって強い生命力をかち得るに至った。安易に神の慈悲を希うのではなく、混沌を悪魔の仕業と忌み嫌い、人為の秩序を徒に求めることもなく、自然と深く共存することにより、真の救いの何たるかを認識するに至った。而るに、彼らの自然観は、単なる愛好の態度ではなく、それを構成する一切のものを、部

分においても全体においても、敬慕する姿勢に基づいている。

主要参考文献

The Celts, by Nora Chadwick, (Penguin Books), 1970.

The Prehistoric Peoples of Scotland, ed. S. Piggott, (Routlcdge & Kegan Paul), 1962.

Celtic Heritage, by A. Rees and B. Rees, (Thames & Hudson), 1961.

Landscape in English Art and Poetry, by L. Binyon, (Kenkyusha), 1930.

The Four Ancient Books of Wales, by W. F. Skene, (Elmonston & Donglas, Edinburgh), 1868, Vol. I.

On the Study of Celtic Literature and Other Essays, by Mathew Arnold, (Everyman's Library), 1910.

「風土—人間学的考察」和辻哲郎著（岩波書店）一九三五年。

「英文学—詩と自然」村岡勇著（英宝社）一九七四年。